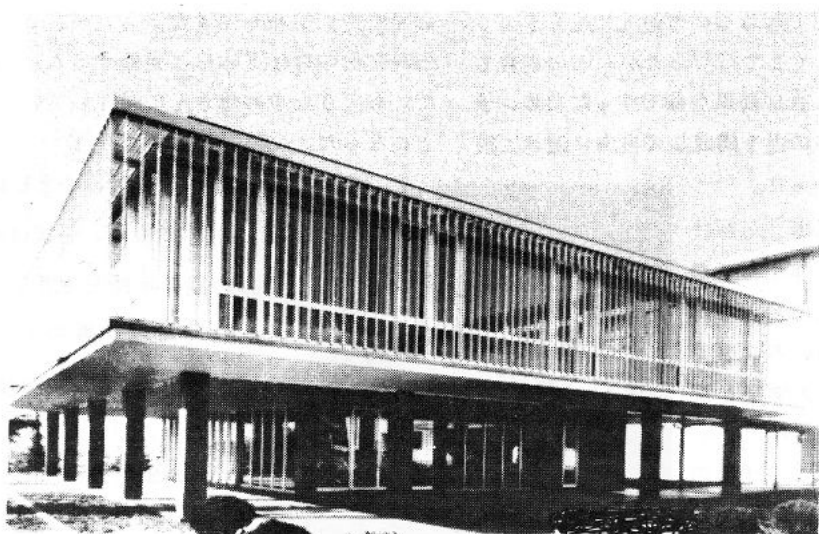




図書館だより

1980-12



完成になった図書館

「子供の広場」とお餅つき

関 克彦

大学祭実行委員会が、大学祭の折に、保育園や幼稚園の幼児を招んで「子供の広場」をしようと計画を立て、これを初めて行なったのが昭和45年で、あれからすでに11年を経過した。十年一昔というが、第一回の「子供の広場」から相談を受け、いろいろ助言をしたりお手伝いをしてきた私としては、その移り変わりについても関心をよせてきたので、この際感想をしるしてみたい。

第一回のときから委員会が考えていたことは、子どもを楽しく楽ばせてやることと、保育者の

立場として子どものあつかに慣れたいという念願とであった。この基本の考えはいまも変わっていないと思われるが、子どもを楽しく遊ばせる具体的な方法はいろいろと変わってきている。

第一回の場合、(A)人形劇、(B)マット遊び、(C)えのぐで描く、(D)粘土で作る、(E)裏山遊び(宝さがし)の5つの遊び場を設定して、子どもが順にそれらの場を巡って遊ぶという方式をとった。実際には子どもを小集団に分け、グループでと引率するかたちをとったので、この「子供の広場」に参加された保育園の保母さんの事

後感想では「子どもが落ちついて遊んでいても、次へ移動する時間がきてしまうので、たいへん急がしく、せっかく考えられた子どもを楽しく遊ばせせるという趣旨は生きなかった」と言われ、成功したとはいえなかった。つまり、子どもの遊び場が、大人の立場からあまりに計画的に設定されていたので「自由なき、子供の広場」となってしまったことへの指摘であった。

そこで第二回には、そのことの反省から、子どもに心ゆくまで落ちついて遊んでもらうよう設定の場を少なくして行なったが、この場合も環境設定はいっさい委員会側でやったため、子ども自身が遊びの場を構成して自由に遊ぶ広場とはなり得なかった。

「子供の広場」三回目の昭和47年は、本州女子から上田女子短大に変わった年で、他にもいろいろな事情があったため、大学祭も遅れて11月18日からとなった。そんなことで「子供の広場」も型通り前年にならって行なわれ、別に新味はなかった。

さて、これまでの三年間の経験で、大学祭の子供の広場としては、何か物足りない感じもあったのは私だけではなかったと思う。そこでいろいろ考えたあげく、大学祭にふさわしいように「子供の広場にお餅つきをやるのではないかと提案した。これには実行委員会も大いに賛成してくれたので、地元の農家から臼をはじめ、餅つき一式を借り入れて、景気よくお餅つきをし、お客に来た幼児たちにも餅つきの仲間に入れてあげた。

こうして、始めて餅つきをしたのが昭和48年だったから、以後毎年続いている「お餅つき」はことし八回目を迎えたわけである。当初借り物で間に合わせた用具一式も、せいろやかまど

は購入されたし、臼と杵は幼稚園へ寄贈されたものを借りて使うので、いっさいが間に合うことになった。

「子供の広場」に招待する幼児は、最初から大屋幼稚園の年長児は欠かしたことはなかったが、そのほかには近くの保育園の幼児も交替で招んだ。しかし三年前に附属幼稚園ができてからは、お客は両幼稚園に限ることにした。また、始めの頃は週日に招待したので幼稚園や保育園の先生方が引率してくださったが、その後日曜とか文化の日など休日に実施することにしたので、お父さんやお母さんに同併していただくことになった。



そこで、ことしは午前大屋幼稚園、午後は附属幼稚園の年長児を招んで21教室で部員指導のリズム遊びをし、そのあとお餅を食べたり、ついたりして、最後に長張司書の操作による「まえがみ太郎」の映画で楽しんでもらった。

このような経過で十回余の「子供の広場」を反省してみたと思うことは、当初行なった豊富な遊び場巡りは、子どもを楽しませるより疲れさせる結果となったので、これを止めて自由遊びを主にした計画も考えられたが、一方に大人も大勢見える大学祭を行なっている最中であるので、それも思うようにはいかないということから、これも実行するまでに至らなかった点に不徹底さがあったというのが第一の反省点である。

そういう試行の過程で「子供の広場」に「お餅つき」を導入したのはよかったということでこれが第二の反省点である。「お餅つき」については、お客の幼児においしい食べものを上げるとのことだけでなく、餅をつく動作そのも

のに楽しいふん囲気を盛り上げてくれるものがあると思う。また、「お餅つき」はメルヘンの世界で子どもに親しみのあることがらでくおむすびころりんのおじいさんが、ねずみにお餅をついてもらって大いに歓待を受けたということは子どもに親しまれている物語である。今の世の中では餅つきも電動機が主となって、昔な

がらの明かるい音をひびかせての臼と杵の餅つきは農村からも姿を消してしまった。そういう世相のなかで、大人も子どもにも親しみのあるベタンコベタンコとつくあの餅つきを「子供の広場」にとり入れたのは、たいへんふさわしいのではないだろうかと思っている。

(教授)

「本を読む楽しさ」

思いつくままに、この短文を寄稿します。

開校当初の図書室にくらべ、新図書館は蔵書数も増加し、部屋の面積も広く、三方より採光され、明るくよい環境となりました。特に教員用の小コーナーがもうけられうれしいことです。

諸姉は専攻の学術、技術を習得されるだけでなく教養書も読まれて、巾広い知識を付けられるようお願いします。

私は閑になったら読もうと医学関係以外の書籍を集め自宅に積んでおきました。五十才の半ばを過ぎ、これらの本を読む時間がとれるようになりましたが、老眼鏡を必要とする視力となり、眼のために一日のうち何時間と区切って読書をしなくてはなりません。若い頃には考えてもみませんでした。残念です。

最近の小説より歴史に興味を引かれ、図書館の「大鏡」「土佐日記」「かげろう日記」「更

菊池 志げ子

級日記」「和泉式部日記」等を読み、王朝時代の気分にあたりたり、郷土史を読んで、婚家の先祖や、実家の先祖の名前が出て来ると驚いたり懐かしく思ったり、生島足島神社に武田信玄公あて起請文(長野県宝第五十二号)を出しているのを知った時は、何か御神縁を感じました。

この頃は宗教書が読みたくなり始めました。神道、仏教、キリスト教等の文献が図書館に公開されているので、段々に読み進むつもりです。

写経もしたいし、讃美歌もうたいたいのです。が、私は調子はずれるのでよくええません。

エレクトーンを三年前から手近においてありますが、民謡なぞもひけたらと思っております。読書で脳の退化を防ぎ、適度の運動で健康を保ち、元気で初老期を越え、中老期を迎えたいと思います。気持は女学生時代と変わりません。可々。

(教授)

菊池先生から図書寄贈

この度菊池志げ子先生が医学関係図書、特に生理学、衛生学、小児科学等、100余冊にわたって菊池蔵書の印もある大切な本を図書館に御寄贈下さいました。幼児教育の基本図書以外、自然科学、特に医学関係の図書が少い本学図書館にとって本当にありがたいことです。紙上をもって厚くお礼申し上げます。

尚、菊池先生御寄贈の図書はすでに受入が終了し、新着棚に並べられてあります。内容については新着書案内51号(55年11月)にくわしくのっています。又、本号最終ページの寄贈図書紹介にも一部をのせてあります。御好意に感謝し、大切に利用しましょう。



シェイクスピアへの誘い

嶋田 貴美子

シェイクスピアが歴大な世界文学のうちで最高の作家であることは誰も疑う余地のないことです。17世紀の初期に彼が死んでから350年余りの間に、彼の各作品には余りにもたくさんの研究書が出されてきました。大学の英文科の学生はほとんどみんな一度は彼の作品そのものよりも部厚い難解な洋書の解説書を片手に、作品の奥義を解明しようとして頭を悩ませた経験をお持ちのことと思います。学問が進歩している限り、この傾向はますます強くなるのは必至でしょう。たしかに彼の作品は底なし沼のように、どんなに厳密に読んだとしても読み尽くすことのできない味わいを持っていることは事実です。

原文の韻律の効果、Middle Englishの読みずらさの中にもひとつひとつ生命を持っているかのような生き生きとした言葉の連なり、それらをみんな自分の中で消化できないもどかしさを私もずいぶんと感じたものです。

しかし、それだからといって一般の読者が敬遠する必要のないのがシェイクスピアの作品のもう一つの魅力でもあるのです。文芸復興期、人間というものに一度に目ざめた社会的環境の中で彼の作品のすべてが生まれたからなのです。「ハムレット」にしても「オセロー」にしても「リア王」にしてもその素材は王侯貴族なのですが、教養の高い紳士淑女だけのものとして彼は作品を書いたのではありません。彼の作品の中にしばしば出てくる卑猥な言葉は、上品ぶらない大らかな一般大衆の健全な息吹であると思われる。

そうであるのに、英文科の学生以外の人々のどれだけが実際の作品に親しんでいるでしょうか。バルザックやドストエフスキーやジイドの愛読者に比べ、シェイクスピアの愛読者はきわ

めて少ないように思われるのです。

しかしそれにもかかわらず、私達はいつのまにか「ハムレット」の父王の亡霊の話や、「ロメオとジュリエット」の夜のバルコニーでの美しく甘い愛の会話や、「ベニス商人」の人肉裁判の場面、「リア王」の王リアが三人の娘に自分への愛の大きさを問うた話など、遠い外国の話としてではなく、しごく自然な形で心に親しんでいることも事実なのです。これはシェイクスピアの作品が長い年月の間に伝承的な色彩が濃くなって、人々はおもしろいおとぎ話を聞くかのように彼の作品の名場面を子供の頃から折にふれ耳にし、又目にしているからなのではないでしょうか。そしてその名場面を美しい感動的な一つの絵として心にきざみつけ、そしてその感動が余りに強いためにその作品全体を汪洋してしまい、各々の作品をすでに理解し切ったかのような錯覚を起こしているのだと思うのです。

昨年イギリスの古いおとぎ話、日本でいえば「かぐや姫」とか「浦島太郎」とかいったたぐいの“Cap o' Rushes”すなわち「い草の帽子」というお話を読む機会がありました。その民話がシェイクスピアの「リア王」に内容のどく大ざっぱな骨格ですけれども、とてもよく似かよっているのに気付きました。ちょうど学生時代に最も胸踊らせながら読んだ思い出の強い「オセロー」を皮切りにシェイクスピアをもう一度勉強しなおそうと思っていた矢先のことでしたので、これはおもしろいと思い、又なつかしさも手伝って早速「リア王」を本箱から引出してきました。学校の授業で苦労して読んで以来、十数年ぶりに手にする「リア王」から近年味わったことのないほどの感銘を受け読みふ

けりました。

より多くの財産を獲得せんがために口先だけのうまいことを並べたてた娘二人に領地はもとより、王冠までも分け与えてしまった老王リアの幸せは四日とはもたなかったのです。老いのゆえにすべてを明け渡し、二人の娘の居城に一月ずつ滞在して幸せな、安楽な余生を送ろうとしたリア王は、どちらの娘からも追い出され雨風の荒れ狂う嵐の中をずぶぬれになりながらさまようのです。リア王の次のせりふが彼の置かれている立場の非痛な心を如実に物語っています。

「風よ吹け、うぬが頬を吹き破れ！ 幾らでも猛り狂うがいい！ 雨よ、降れ、滝となって落ち掛れ、塔も櫓も溺れ漂う程に！ 胸を掠める思いの如く速かなる硫黄の火よ解を突裂く雷の先触れとなり、この白髪頭を焼き焦してしまえ！ おお、天地を揺るがす激しい雷、この丸い大地の球を叩き潰し、板のように平たくしてしまってくれ、生命の根源たる自然の鑄型を毀ち、恩知らずの人間共を造り出す種を一粒残らず打砕いてしまうのだ！」(福田恒存訳)

そして門を固く閉ざしてしまっている悪魔とも化した娘の仕打ちに、リアの心は狂気に食いつくされるのです。末娘コーデリアとの和解が一つの救いになってはいるものの、狂い死にした老王にこれ以上の非劇はないでしょう。大勢の忠臣にかしずかれていた名王リアがゆえに、なおさらその非劇は見るに耐えがたい印象を与えるのですが、このことは多かれ少なかれ現代の老人一般にも共通してある非劇なのではないでしょうか。

一読しただけでもこれだけの重みを感じる「リア王」という一つの作品に、「お前達のうち、誰が一番この父の事を思うておるかそれが知りたい」につながるあの名場面だけを心に描くのみで作品の全体を知っているかのような印象を

持たれては余りに寂しく感じるのです。「ハムレット」にしても「ロメオとジュリエット」にしても同じことが言えます。

シェイクスピアが中世文学であって、近代の私達のセンスからはおよそかけ離れていると思われる方もいられるかもしれませんが、けっしてそうではないのです。世の中が進歩し、社会の形態は移り変わってもそれを構成する人間だけは不変なのです。その古今東西変らぬ人間の中に巢食う悪をこれ以上正視するに耐えないほどにまで堀り下げ追いつめる、あるいはいくら美徳を備えた人間達であっても彼らの作る不自然な結びつきはけっして許すすわけにはいかない。こういった考えの上にシェイクスピアの悲劇は成り立っているのであり、この真髄を見落しているところに大きな誤りがあるのです。

それにしても350年余りの歳月と民族の違いをも超越した、普遍的に人間の心の中にある模倣としたものを一つずつはっきりとした形で露呈させるシェイクスピアの洞察力はすごいものだと思うのです。それゆえに人間悪を扱った彼の悲劇は読み進むにつれ恐くさえてきます。そういった私達自身の心の中にある、あるいは人間界の中にある醜くさ、惨めさ、その結果としての悲惨さに私達は何とか目をつぶろうとし、そっと避けて通りたいものだという潜在的な意識が働くものです。

生活が豊かになり、ある不幸な国を除いて、平和な世の中にいる私達にとって、特にその意識は強いと思われます。そして戦争という最も悲劇的な経験さえも忘れてはばかりかそれを謳歌しつつある現在のよな世相の中でこそ、このようにはっきりと人間の本性に迫り、浮き彫りにしてくれるシェイクスピアの作品を読んではほしいと思うのです。親と子、恋愛、結婚、その他もろもろの誰も避けて通ることのできない人生の問題を厳しく追及する彼の作品に今も脈々と波打つ真理を私達は発見するに違いあり

ません。最もみずみずしい豊かな感受性にあふれている学生時代にこそ、シェイクスピアの一

読をおすすめしたく思うのです。

(兼任講師)

中国見聞雑録 其一



第 1 日目、北京の巻

塩 入 秀 敏

『短大だより』第 9 号に、訪中を控えての小文を書かせて頂いたが、9月27日に出発し10月10日帰国という予定通りの日程で中国に行ってきた。China(中国)に行って china(陶磁器)を見て来ることを個人テーマとしての訪中だったが、周口店遺跡の北京猿人展覧館から上海博物館まで、大小10もの博物館を見学し、非常に多くの陶器や磁器を実見することが出来て、初期の目的は一応達せられたと思っている。いずれ近い内に訪中団としての報告書がまとめられるので、ここでは、あまり肩の凝らない軽い事で「見聞雑録」とし、簡単な報告にしたい。

我々の機は、紀伊半島南端・鹿児島・上海上空を経て北京に向った。随分大回りをする訳だが、国交の開かれていない韓国の上空を飛ぶことも出来ず、仕方なしに大回り空路となっているのである。北京キャピタル空港は、北京市街から稍離れた所にあり、新東京国際空港(成田空港)の立派さに比べると、どうしても少し貧弱と言わざるをえない。しかし、空港ビルの屋上には、毛沢東の字と思われる「北京空港」なる大きく立派な字が載っていた。

空港から北京市街までは、ひたすら真直ぐな空港道路が続いている。ポプラ並木、柳並木、そのまわりはただただ畑である。時々馬車が通り、人が沢山乗っている。ダークグリーントラックも行き交う。こちらも荷台に人を大勢乗せていることもある。どうやら荷台に人を乗せてはいけないという規則はないらしい。

北京市は中華人民共和国の首都で、上海、天津と同じく直轄地である。面積17800Km²、人口850万人である。自家用車がないので自動車は少なく20万台、そのかわり自転車は300万台とやたら多い。タクシーは半分がトヨタ(コナ)だそうである。(我々が乗ったバスは日野)

外国人団体には、中国国際旅行社総社の通訳1人と、支社の案内人1人の計2人が必ず付く。通訳としては宋さんという女性が、また北京での案内人としては李さんという男性が付いてくれた。2人共日本語が上手で、特に宋さんは綺麗な標準語を使う人である。

中国の案内人はお土産を買う時間を出来るだけ多く取ろうとするということを知っていた。李さんはそれ程でもなかったが、それでも、北京で最初に連れて行かれた所が「瑠璃廠」(リュリチャン)という古書店街・篆刻屋街であった。戦前の中国の大学に在学して、ここで本を買った日本の学者も多いという。怡飴齋という店で筆や墨や印材を沢山買い込んだ人もいた。中国で買い物をする、金額の多寡にかかわらず「友貨凭証」という領収書をくれるので、あとで整理するのに大変都合がよい。

次いで天壇公園に行った。皇帝が天に諸報告をする場所であるが、北京市の北に地壇、東に

日櫃、西に月櫃と全て揃っている。ここで換金した。外人専用の紙幣があり、円と角の単位がある。その下に更に分があるが、これは中国の人々と同じ硬貨を使う。日本円の約150円が中国の1円であった。「可口可楽」(コココーラ)があった。350mlカン入代金約180円也。日本では110円なので相当高い。

初日はこれだけにして宿舎に向った。車窓から北京市街を眺めていると大変面白い。自転車が多いことは前に書いたが、本当に多い。しかもあまり信号を守らない。歩行者もまた同様である。慣れない日本人が、幅50~80mもある大安路を横断する時などは大変で、それこそ命がけである。こんな状態だから自動車は間断なくクラクションを鳴らし、警笛の洪水である。少し大きな交差点には必ず交通整理の警察官がいるが、日本ではめったに見られないことである。そんな状況を反映してであろうか、「騎自行車要遵守交通規則」とか「一慢二看三通过」「中速行駛安全礼址」「紅灯停車」「注意急殺車」

というような大交通標識が掲げられているのだろう。

ここで面白いことがあった。ホテルが変更になったというのである。ホテルについては全て中国国際旅行社で決めており、我々は一切わからずあなた任せになっている。しかも、中国国際旅行社も各地の支社でそれぞれホテルを決めるので、北京の案内人も次の洛陽でのホテルはわからないという。ともあれ、「前門飯店」というホテルに投宿することになっていたが、急速「北京市第4招待所」に泊ることになった。しかし、2日目からは北京第1のホテル北京飯店に泊まれるようになったのであるから、何が幸いするかわからないものである。

何はともあれ、中国第1日目は無事終った。招待所の夕庁(餐庁=レストラン)で10品以上の中国料理と茅台酒と五星啤酒(五星ビール)に舌づつみを打ちながら。(講師)



車窓に想う

須永 淑

明窓浄机というにはほど遠くとも、せめて一人で静かに座って居られる自分の書斎がほしい。心の趣くまゝに誰にもわずらわされず読んだり考えたりできる場所と時間がほんとうにほしいものだと思う。でも現実にはなかなか出来ないことで、今でも自分専用の机がないと言えば友だちは、そんなばかなことが、と笑うのである。多くの弟妹たちと昔の古い家に育ち、戦後は小さな家で子育て時代をおくり祖母になった現在も、家族にかこまれては居るが一人坐れる時間と空間は皆の寝静まる真夜中しかない有様だ。

このような私にとって大切な時間は大学への往復の車中である。信越線の列車内の数時間は自分をとりまくあらゆるかゝりから解き放さ

れて完全に一人になれる。本来の自分にかえり自由にものを考えたり読んだりできる貴重なひとときなのである。そう言っても車窓の書斎を毎回必らず確保するためには、いろいろ苦勞する。混雑を避けて時刻や列車を計画的にえらび何両目のどのあたりが坐れるか見当をつけていても、季節により曜日により乗る人の様子は変わる。それでも長年、毎週のことなので、心の訓練もできて、たいていは静な時が持てるようになった。

車窓の書斎ですごすのにそなえて、しばらく以前は新書を一冊持って出ると往復で読み終ることができた。近頃は視力が大切だと思うので無理はしない。読みたいものを持って出ても気

が向けば読み、時々窓外を眺めて休み、思いをひろげ深める時間をもつ。最近を読んだ後の思う時間がむしろ一番充実したものであることに気づいた。

上野発の車中に腰を下ろすと日常の忙がしい生活は後へと遠のく。行く手には北関東の山々が青春をそこですごした頃の姿そのまま次第に近づいてくる。周囲の俗に都市化した地域は書物類を読みながら通りすぎて一息つくころ丁度高崎付近にさしかかる。赤城、榛名、妙義と上毛三山を仰いで碓氷の山に入るころは、すっかり清澄な気分に見たされているのに気づく。碓氷峠をぬけ本から窓外に目を移すと、これから上田までが最も美しい区間で、私が大切にしている見おとせない景観がつづく所である。

浅間五山から烏帽子の山群を北に、千曲川と対岸の高原につづいて参科、霧ヶ峯近くの高地など南に見て行くこの間は往復とも右側の窓際の席がよい。往きはたいてい午前中、陽光あふれる山麓から頂に至る山容が見えらる。帰りは夕暮時、夕焼の残照が空を染めながら、山が黒く輪郭を見せて暮れてゆく景色を眺めるには進行方向右側に坐を占めたい。見なれた山や林がわづかな時の移ろいに微妙な光の変化をうけてすごいほどの輝きを見せ、息をのむ思いを経験するのはこのあたりを通るときである。

春四月木々の芽や、動くころひらひらと咲く辛夷の花、落葉松の芽吹きは往きと帰りで緑の濃さをすっかり変えるほどはやい。この高原の夏雲の雄大な白さと駅に咲くダリヤやひまわりは鮮やかだ。涼風が立つと軽井沢のどうだんがまず紅らみはじめる。浅間山が殊に高く高く仰がれるのもこのころである。山々の頂が夕陽に映えて紫を帯びてくるころ紅葉がはじまる。山麓一帯の落葉樹林がかがやくように彩られて、やがて冬へと移ろう。こうして又、朝は霧氷の見られる季節をむかえるのである。

書物から目をあげて見るたびにくりかえされ

るこの景観は私に与えられた恵みの一場面である。何の故あってこれほどまでに美しい時を私ひとりに与えられるのだろうか。どこに問うても答はない。これを観て何を思えと、何をせよとこのように心にせまるのだろうか。はかり知れない天地の大なる存在に頭を下げ合掌するのみである。

—おおいなるもののちからに ひかれゆく
わがあしあとの おぼつかなしや

九条武子

(助教授)

読書週間に思う

2年 井出久仁子

「すばらしき人生 — 本との出会い」を標語に読書週間が始まっている。

灯火親しむ読書週間が訪れて、秋の気配も深まってくる一方だ。最近ではテレビ、新聞などによる情報過多時代といわれ、読書離れが進んで、読む人と、全く本を手にしなない人とが、はっきり区別されてきているようである。私たちの町でも、本の貸出しを有線放送を通じて呼びかけているが、はたして、どのくらいの人が利用しているかよく知らない。実際に寝ころんで、テレビを見ていれば、どんどん情報、知識は、入って来るし、日々の生活になんら、支障はない。しかし、つぎつぎに入ってくる情報に押し流されて、じっくり本を読み思考することから遠ざかっているように思われてくる。私も、自分の読書の量が少なくなっている一人で、先輩や友だちのなかには、たくさん読書量を誇っている人もいて、うらやましくもあり自分も負けられないと思う。

しかし、読書にも、個人差があり、早読みで短時間で何冊もこなしてしまう人もいるし、また一冊の本をくり返し時間をかける人もいる。

昔の人は、「読書百ペン意おのずから通ず」

といい文章をくり返しくり返して読めば作者のいわんとしていることが自然とわかるものだとしています。

本は、多くを読むことも必要であるが、深く味わって読むことも大事ではないかと思えます。漢和辞典で、「読む」というのを見ると、「みぬく」というみがあります。作者はどんなことをいいたいのか反復し、読み返して見ることも、必要なことだと思えます。

出版物、本の量は、その国の文化のパロメータといわれています。漫画、週刊誌、単行本、その他あらゆる出版物を必ず一冊づつ保管するという国立図書館も出版物の洪水でパンクしそう。新しく建て増して収容するそうです。このおびただしい本の中から、自分に適した本を選んで読むことも大切なことだと思えます。

昔から、「活眼をもって活書を読む」という言葉が有るそうですが、良い判断力をもって、人生にプラスになる良い本を読むように心掛けたいものだと思います。

新図書館に感じること

2年 松山 育子

「ここで、靴の汚れをよく落として入って下さい。」と注意され、新図書館の使用説明を、聞いたのが、ついこの間のように思い出されます。建設中などは、「外から見て、刑務所か、おりのようだね」などと、この鉄格子の建物を批判し合ったりしたものです。もうじき、利用して一年目になろうとしています。当初は、靴をはき変えて、スリッパを使用するか、それとも、そのまま、入っていい事にするかなど、細部にまで気を使い、論議されたようです。が、今こうして、靴のはき替えなしに利用できる事をうれしく思います。ただでさえ、本校舎とちょっと離れている図書館に、はき替えるという動作が入ったなら、利用度に影響していたと思います。

新しくなり、明るい雰意気の図書館を建てていただいたので、私達学生は、喜ばしい事だと思えますが、不便な点もあるので述べたいと思えます。まず、トイレが館内にないということ。それから、ブラウジングルームが狭く、新聞を広げて読む時に読みにくい事、また、視聴覚室などクラス単位などで利用する時、狭くて見にくい面があると思えます。今後、改造できるなら、お願いしたいと思えます。まだ、気づかずにいて不便な点があると思えますが、学生側との話し合いの機会を、これからも持ち続けて、実のある、使用しやすい図書館にしていったら、と思います。

今までは、施設面について述べましたが、本などの内容面について、書きたいと思えます。まず、なんと言っても、短大の図書館には、文学の分野の本が少いと言えらると思えます。これは、学生側としては、一番言える事で、もっとふやしてほしいと願います。現代は、以前に比べて、本を読む学生が減っていると言われますが、女子短大という事で、割と読書好きの学生も、多いと感じます。しかし、図書館に行っても手軽に手にとって読める小説の分野の本が少ないので、さみしく思われる方が大勢いると思えます。そこで、小説類をもっとふやしてほしいと思えます。

もうひとつ、普段は割とひっそりとした図書館というイメージで、レポート作成時期となると、にぎわう感じですが、そこで、専門書が古いという声を耳にします。古いのも利点は、あると思えますが、質がある専門書で新しく発行された理解しやすいものを、もっと購入してほしいと思えます。

学生時代に、いろいろな本を読み視野を広める事は、大切な事だと思えます。特に、金銭に余裕の少ない学生にとって、図書館の利用というのは、かかせないと思えます。これまで、施設面と内容面から、私のつたない希望を述べてきましたが、少しでも、みんなが、利用しやすくなれば幸せです。



幼児教育者になるために

1年 酒井美恵

発達心理学の守屋志雄氏は、幼児教育者の資質として、次の三つをあげている。

まず第一は、子どもに対する「愛情」である。単に「可愛がる心」というのではなく、その子どもをしてより健全で、よりすこやかに伸びることを願う、祈りの気持ち、これこそが真の愛情だと言っている。とかく子ども好きであれば子どもに対して深い愛情を持っていると思いがちだが、それがかえって子どもの生長にマイナスになっていることが少なくない。私達は将来、子ども達に、彼らが成人した際の、社会生活や私生活への適応能力になる「基本的なもの」を学びとらせようとする責務を持つことになるのだから、子ども自身を思う真の母親の様な愛情で、彼らを保護し育てていこうとする気持ちをもちそなえていかなければならない。

第二は「技術」である。いくら真の愛情があっても、教育という面から考えると、やはり指導能力、いわゆる技術が必要なのだ。そこで私達は今、短大で専門知識や技術の習得に励んでいる。

問題は、第三の「哲学」を持つ事なのだ。簡潔に言えば、「子ども達をどう育てるか」の信念であって、いわゆる人生観を確立することらしい。しかし短大生活は、技術の習得に追われ、形の無い、目に見えない「心」を作るための学習意識が薄れがちである。ましてや十九や二十の人間が、どれだけ人生について考えるだろうか。しかし実際に人格形成期を向える子ども達に、私達の人生観、世界観の与える影響は大きい。希望や理想をなくした義務的な保育は、子どもにとっての大変な不幸である。ある書籍に、「先生たるべき以前に、人間でなければならぬ。」という文面があった。多くの体

験と学習によって私達は、より一層自分という人間について考える必要があるようだ。

以上のように「愛情」「技術」「哲学」という三つの公務以外に、生活態度という問題がある。ある調査によると、現在の短大生の半数以上が、昼食の弁当にスプーンやフォークを使用しているという事だ。別に何とも思わないが、ある著者によると、こんなことで幼児の「生活指導」ができるのか。身近な生活経験の中で、基本的な生活習慣を身につけさせる時に、著者は不便だのなんのという事は許されない。子ども達の鏡にはなれない。と厳しい文面を残している。

また、近頃の学生のことは、非常に乱雑で粗雑になっている。このようなことばを使っては、情緒的であたたかい、幼児の心を育てることばが出てくるはずがないと書いている。

入学以来、幼児教育に関する本を、数冊しか読んでいないので、自分なりの考えを表わすことはできなかったが、学長先生が言われたように、「いかなる肥沃な土壌も耕さなければ、ものが育たない。」と同様に、私達も多くの体験や書物からの知識で、心の土壌を耕していかなければならないと思う。

〈本を寄贈して下さい〉

独立の図書館が建設されて、本学図書館は蔵書の少なさ、質の貧弱さが目につきます。年度予算も限りがあり、多くの図書が購入できません。

そこで全学の皆さんから、読み終わったまま用済みになっている本がありましたら、図書館に寄贈していただきたく思います。1人1冊づつでも多勢の力で、図書館の蔵書を豊かなものにしていきたく考えます。

研修会に参加して

窪田 寿子

先頃、「私達短期大学図書館担当者研修会」が成田市で開催され、その研修会に参加する機会があった。

この会は図書館員にとって「大学図書館職員研修会」に次いで組織の大きなものであり、全国の私立短期大学図書館（四年制との併設の場合も含む）が会員となり構成されている。昭和34年の発会以来、二十一回目をむかえ、参加者も年々増加し、本年も盛会のうちに会を終えることができた。

今回の研修課題は、「図書館運営規程」「スタッフマニュアル」等館員の実務に関する討議が中心となったが、ここでは、学生とのかかわりの深い「奉仕」の分科会に参加した折に、討議されたことを、日頃のカウンター業務の中で感していることと合わせて二、三述べてみたい。

まず、学生から毎日受けている「参考業務」であるが、係としてレファレンスにどの程度援助したらよいかという疑問である。日々無意識のうちに質問に応じている場合が多いが、本来の姿としては、図書館員は中立の立場であって質問については、自分自身で調べる方法を教えること、つまり答えは出さないように情報を提供することが望ましいとされている。しかし、この前提を崩して「参考業務」がしばしば行なわれている。本学図書館におけるレファレンスは、授業・卒業研究・クラブ活動等の資料・情報サービスが主であり、「幼稚園指導要領について」「文化祭に演じる人形劇の台本はどんなものがあるか」「就職試験で上京するので、東京都の地図を見たい」等、手元にある資料ですぐに解決できる例であるが、中には「この字はどう読むか」辞書をさし出すと「どこに出ていくかわからないどうしょう」困っている様子

なので理由を聞いてみると「今日の授業に発表するのです」そこで軽率に「この字はこう読んでこういう意味がある」と内容についての答えを出してやることになる。この場合時間がなく窮地に立たされていた学生にとっては、ありがたいことだが、館員の姿勢としては好ましくないことであり、そこでジレンマに陥るのである。この分科会に集った館員の多くが「館員である以前の気持ちで利用者にサービスしている」という本音が出され、たて前だけでは動きのとれぬ現状を浮き彫りにしている。

開館時間の延長について、多くの大学で問題とされている。夜間部のない大学では一般に午後5時閉館としているが、学生からは1~2時間延長の希望があり、館員不足の現状に頭をいためている。そんな中で、都心のある学校で、自校の学生アルバイトで開館延長を始めたところもあり、これは試行の段階だが、注目を浴びている。

又、「図書の貸出」について、特に図書の返却に怠慢な学生が多くなっている点が指摘された。本学においても同じ傾向である。毎年作成している利用者状況の表でみる限り年々利用者が増加している。これは、館内設備の充実・カリキュラム編成・書店・市立図書館への交通の不便さ等、いろいろな要素があげられるが、館員にとっても心強いことである。しかし反面、返却の期限に対する意識が薄い利用者の増加も現状である。図書館では、延滞者について、掲示板で呼び出しをし、さらに二週間程度過ぎたら葉書による督促を行なっているが、係としても心理的に負担な作業である。

最後に、カウンター業務を行ないながら、気がかりなことは、少ないスタッフで日々の業務を行っているので、どうしてもカウンター内に図書の受入・整理の仕事を持ち込み、本来の利用者に対してのサービスがおろそかになっていることである。しかし「気持ちよく図書館を利用してもらおう」と係としての心がけは、いつも

変わらずにカウンターに出ているつもりである。に仕事に対する問題意識を持つことができ、有意義な二日間だと思っている。

…【図書館ガイド】……

視聴覚機器，同資料の利用案内

— 今号から、学生の皆さんが図書館をより効果的に利用できるように、図書館のシステムや、概要、又は新規に取り入れられたこと等を分かりやすく説明するためにこの覧を設けます。

今回は、視聴覚機器、資料の利用の仕方、及視聴覚資料目録について説明します。

〔1〕 視聴覚機器，資料について

図書館の重要な役割の中で活字で印刷された図書(本)が備えられていることは誰もが承知していることであるが、印刷文化(図書)と並んで今日では図書館に視聴覚資料(スライド、フィルム、マイクロフィルム、地図、掛図、楽譜、紙しばい、レコード、サウンド・シート、録音テープ、録画テープ(VTR)等)の資料を備え付け、それらを図書とは別置して、視聴覚ライブラリー(又は視聴覚センター)としての機能を兼ね備えている図書館が増えてきた。

本学の図書館も独立の建物になって、視聴覚室が付設されて、これを機に今年度から視聴覚機器、及資料を充実させていくことになりました。

特に機材は財政的に大変お金のかかることなので、数年がかりで1点1点充実していく方針である。本年は特に教材優先で、ビデオ(付テレビ)スライド等が購入され、オーバーヘッドプロジェクターも業者の好意により寄附されました。

視聴覚資料に関しては、紙しばい、楽譜、スライドの他は、図書館用の資料は皆無に近い状態であるが、機器類の整備と並行して少しずつそろえる方針である。有効な利用を期待する。

次に貸出利用規程を内規したので学生の皆さんもよく承知の上、大切に利用して下さい。

〔2〕 視聴覚資料，機材貸出利用規程

1. 視聴覚資料、機材の貸出は「視聴覚機材使用申込書」(別紙、様式省略)に所定事項を記入し、図書館カウンターに提示して貸し出しを受ける。
2. 同一資料、同一機材の申込みが重なった場合は予約順とする。但し、教科の使用を優先する。次に学内外行事、クラブ活動、個人使用の順と

し、機材の予約は少くとも1週間前にする。

3. 視聴覚室内のみでの機材、資料の使用にも申込を提出する。この場合の使用時間は図書館開閉時間中とする。
4. 持込みレコード、テープは許可する。
5. 資料、機材の返却は当日閉館時刻までとし、学外に持ち出す場合も翌日の朝までとする。
6. 機材の学生の使用は、機械操作に精通した指導者、顧問のいないクラブ活動等には貸出しをしない。指導者がやむなく不在で使用する場合は、係から操作の指導を受けてから貸し出す。
7. レコードは原則として貸し出しをしない。
8. 紙しばい、楽譜は、資料の特質上、従来どおり閲覧室に備え付け、一般図書と同じ貸し出し方法とする。
9. 視聴覚資料の使用には著者権法等も注意し、破損等にも充分注意して利用する。

〔3〕 視聴覚資料目録について

本学図書館の目録については図書館ガイドブックでもくわしく説明してあるが、諸目録が段々に整備されてきている中で最後に視聴覚資料目録の作成が課題として残されている。職員の不足等で、未だ完了するまでに致っていないが現在、紙しばい、楽譜、レコードの目録から作成を急いでいるところである。

次に形式を示してあるが、各資料各の受入順基本目録と、同目録の誌名(題名)のABC順配列目録とを閲覧用に整備している。

毎日追われるような日々の業務の中で、一般図書の目録を整備することでさえやっとの状態であるので、この目録が完成されるまでには、少し時間がかかると思われる。利用者の理解を望みたい。(当目録は本学独自の形式によるもので、用紙はブルーカードである。)

(A) 紙しばい(記号K)

分類記号 K	標題 (シリーズ名) はのいたいモモちゃん 美しい心シリーズ				
登録番号 I	製作者(所) 童心社	製作年 1972	規格 巻コ枚色寸型 マ 彩法式 12 場面	時間	備考(用途地)
年月日 49.6.21	作者, 指導者, 解説者, 演奏者等 松谷みよ子作、鈴木末央子画				
受入先 英文堂	注 記				
¥ 550	大 要				

(B) レコード(記号R)

分類番号 R	標題 (シリーズ名) イタリア古典曲集/林康子				
登録番号 23	製作者(所) ビクター	製作年 1978	規格 巻コ枚色寸型 マ 彩法式	時間	備考(用途地)
年月日 54.3.14	作者, 指導者, 解説者, 演奏者等 林康子(歌)加納悟郎(伴奏)				
受入先 加納悟郎	注 記				
¥ 2,500	大 要				

(C) 楽 譜 (記号Ms)

分類記号 Ms	標題 (シリーズ名) 子供のシューベルト				
登録番号 69	製作者(所) 音楽之友社	製作年 1969	規格 巻コ枚色寸型 マ 彩法式 42P(1冊)31 cm	時間	備考(用途地)
年月日 52.1.18	作者, 指導者, 解説者, 演奏者等				
受入先 琴光堂	注 記				
¥ 200	大 要				

~~~~~ ニュース ~~~~~

開館時間延長のおしらせ

学生の皆さんから、開館時間の延長を望む声が強いですが、現在の職員の構成では不可能です。が、図書館としても何とか要望にそいたいと考えて、これから卒業研究のまとめに入る12月中旬に1週間だけの延長をします。

12月15日(月)~12月19日(金)

午後 6:00 まで

12月20日(土)

午後 3:00 まで

尚、例年、この期間グループ各に非常に騒がしくなります。閲覧室では静かにして下さい。

又、発表のため作成する模造紙等の清書は1階視聴覚室を使用下さい。

~~~~~



○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 注 意 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

- 図書館のロッカーの鍵をもっていかないで下さい。他の人が利用できません。充分注意して下さい。
- 閲覧室、及ブラウジング・ルームでは静かにしましょう。
- 大きいカバン・コートはロッカーに入れましょう。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

*** 寄 贈 図 書 案 内 ***

— 昭和 55 年度主な寄贈 —

• 公害食品(堀口博)	三 共 出 版	菊池志げ子先生	寄贈
• 人体生理学入門(伊藤真次等)	朝 倉 書 店	〃	〃
• 必修眼科学(庄司義治)	南 山 堂	〃	〃
• 小衛生学(石川知福)	吐 風 堂	〃	〃
他 医学関係図書、93冊 資料 17冊 総計 110冊			
• 復刻、信濃第一次第二巻(昭和8年)	信 濃 史 学 会	本学前事務長 遠藤憲三氏	寄贈
• 長野県史、近世史料編・第六巻中信	信 毎 書 籍	長野県教育委員会	〃
• 〃 近代史料編 第一巻維新	〃	〃	〃
• 〃 〃 第五巻(三) 蚕糸業	〃	〃	〃
• 長野県教育史 第四、第十四巻	長野県教育史刊行会	〃	〃
• 県立長野図書館増加図書目録第1集	県立長野図書館	県立長野図書館	〃
• 佐口民俗誌稿(長野県史刊行会)	長野県史刊行会	長野県史刊行会	〃
• 日本大学の九十年	日本大学広報部	日本大学	〃
• 和洋学園八十年史	和 洋 学 園	和 洋 学 園	〃
• 文通遺児育英会十年史	交 通 遺 児 育 英 会	交 通 遺 児 育 英 会	〃
• 広報まるこ縮刷版	丸 子 町 役 場	丸 子 町	〃
• 別所時報縮刷版	別所時報復刊刊行会	別所時報復刊刊行会	〃
• 子ども時代(長野県児童文化史研究会)	信 毎 書 籍	天田邦子先生	〃
• 明日の幼児教育を考える(水間大吉)	明 治 図 書	水 間 大 吉 先 生	〃
• 保育者のための読書案内	全国社会福祉協議会	長野大助教授 萩原清子氏	〃
• 歴史とは何か(岩村忍)	中 央 公 論 社	本学2年生 長谷川順子氏	〃
• 菅平の薬草(菅平研究会)	菅 平 研 究 会	安 藤 裕 先 生	〃
他 菅平研究会叢書計 6冊			
• 郷の華3.4かるいさわ(土屋長平)	土 屋 長 平	軽井沢町 土屋長平氏	〃
• 誰が信じ得たか(興相正敏)	新 教 出 版 社	須 永 淑 先 生	〃
他 絵本数点			
• 仏教教育の手引き(浄土宗保育協会)	す ず き 出 版	上田市 にしど教材殿	〃
他 絵本数点 手づくりろう1セット等			
• 雑学歌謡昭和史(西沢爽)	毎 日 新 聞 社	本学講師 西沢爽氏	〃
• 食事と人生(製粉振興会)	製 粉 振 興 会	製粉振興会	〃
• どろんこさぶ(長崎源之助)	借 成 社	長崎源之助氏	〃
• 忘れられた島へ(〃)	〃	〃	〃

編 集 後 記

独立の図書館になって、利用者の図書館に入ってくる姿勢にも大学図書館らしいきちんとした利用態度がみられるようになって、館員としてもうれしく思う。学生時代、専用して使用できる図書館であるわけだから、時間の空いている限り利用してほしいものである。

図書館だよりも7号を数えて、特別な企画はしなかったが、多勢の方々から寄稿していただき、内容豊かなものになりました。今後も一層の理解、協力をおねがいをする次第です。

(長張)